

教職に関する科目についての一考察 — 教育実習前・実習後の意識変化から —

A Consideration of Subjects Related to the Teaching Profession — From Changes in Awareness Before and After Training —

中村 稔

要旨

保健体育科教員をめざす学生が、教職に関わる資質についてどのように自己を振り返っているかを教育実習前と実習後に確認することで、本学での教職に関する科目の充実を図るべく調査を実施した。

実習前は「生徒とのコミュニケーション、関わり方」「生徒への指示、説明などの伝え方」などの生徒との関わり方に関する項目に意識が集中した。実習後では「授業づくりの視点や方法」「指導案の作成能力」などの授業関連項目の割合が上昇した。

また、指導教員の学生への評価では、「説明・指示の出し方」や「授業を計画するうえで注意すること」「次の展開に進む際の繋がり」の指摘が多く、『生徒との関わり、実習への取り組み、進歩、発声』の評価は高かった。

その結果、学生は3年次終了までに身につけるべきこととして、「生徒への指示説明、授業づくりの視点や方法、指導案作成能力」など指導に関する項目に高い回答率を示した。

キーワード：教育実習 教職に関する科目 授業改善 学生の意識 指導教員の意識

I. はじめに

教育実習とは、大学で学んだ知識や技能を基礎として、教育者としての愛情や使命についての考察を深めるとともに、指導教員のもとで、学校教育の実際を体験的・総合的に理解し教育実践の基礎的な能力と態度を身に付ける場である。

一方、教員を目指す学生にとっては、憧れの職業を実体験できる期待とともに、これまでの学びがどれ程通用するのかといった不安も大いに感じる学びの最終ステージである。実習受け入れ校にとっては、教師を目指し真剣に取り組む学生と在校生とが身近に接することで、在校生のキャリア形成に大いに役立つ機会となり、教職員にとっても、母校を卒業し同じ仕事を志す教え子の姿は、日々の仕事に活力を与え士気高揚につながる有意義な機会でもある。

しかし、年度当初に予定したカリキュラムやホームルーム、学校行事等の特別活動に対して、実習生の学びに応じた工夫・修正・変更等を加えたり、実習後には補足授業を実施するなど多様な対応が新たに生じる現状がある。教育実習は学生を受け入れる学校にとっても大きな負担となる期間と言えよう。学生を送り出す大学は、より意義ある実習となるよう学びの工夫・充実を図らねばならないと強く考える。

そこで、保健体育の教員を目指す学生が、ある意味新たな学びの出発点とも言える約3週間

の教育実習において、どのように感じ自己を顧みたのかを把握するとともに、実習前と実習後の意識変化等から、教育実習の実態を把握し、本学における教科教育法や教育実習事前・事後指導、教職実践演習等の教職に関わる授業の改善・充実を図る基礎資料とすべく調査を行った。

また、本学では保健体育教員を目指し毎年約70名が教育実習を行っている。この学生に対しての教育実習等にかかわる意識研究については継続的に実施されてきた（齋藤：2015、2016）。特にここ2年間は、コロナウイルス感染症の影響により、3・4年次での学びや実習期間に変更、中止など様々な課題が生じた。本学における先の研究との対比も試みながらコロナ禍における学びの影響についても考察し、今後の講義方法の参考としたい。

II. 研究の手順

1. 質問項目

本大学で実施された教育実習等にかかわる意識調査の研究（齋藤：2015、2016）[以降「先行研究」と表現]の研究方法などを援用し作成した。

2. 調査対象

神戸親和女子大学発育発達学部ジュニアスポーツ教育学科
教育実習生 73名（保健体育教員免許取得希望者）

3. 回答法

複数回答の多項選択法等による。マイクロソフト365の Forms を使用した。

4. 集計

(1)から(3)については、項目毎の出現率（回答出現数／回答出現総数）及び回答率（回答出現数／回答者数）の数値をもとに、その特徴や実習前後の比較を試みた。

また、(4)(5)については、実習後におこなった調査であり、教師観や実習観、指導教員の指摘や賞賛等、自己の振り返り調査とした。なお(2)を除き複数回答可とした。

- (1) 教育実習の前後に強く考えること
- (2) 教育実習前後の優先順位
- (3) 3年次終了までに身に着けるべきこと
- (4) 保健体育科教員になるために求められる資質
- (5) 指導教員からの指摘や称賛

5. 調査対象者数及び回答率

実習前：5月11日に回収 回答者数73名中65名89.0% 一部教育実習中のため未回収

実習後：11月1日に回収 回答者数73名中46名63.0%

※10月末段階で教育実習未終了の学生は未回収

III. 結果と考察

1. 教育実習の前後に強く考えること

はじめに、本年度における教育実習は、コロナ感染の影響により秋期実施が増え、現段階において終了していない学生がおり（2021年10月末）感染対策への配慮からネット調査を実施した。しかし、学生自身も不慣れな状況であり、調査回収が困難な状況にあることを申し添えて

おく。

さて、表1は項目ごとの出現率(A/B、a/b)及び回答率(A、a/回答者数)を示したものである。ここでは、各項目に対する学生の回答状況を明確にするため出現率を主に使用し、教育実習前と実習後の意識変容を確認するとともに参考数値として回答率を使用する。

実習前に最も高い出現率を示したのは、「⑧生徒とのコミュニケーション、関わり方」22.1%、次に「③生徒への指示、説明などの伝え方」20.6%であった。この両者は、ホームルームや部活動など授業以外での関りと、授業場面を想定した伝え方、関わり方の困難さをイメージしていると考えられる。いずれも教育の実施場面では重要な資質である。また、3番目の高さを示した「①授業づくりの視点や方法」16.6%は、③と同様に授業実践では欠かせない要素である。この上位3項目には、授業の準備要素、授業実施時の伝達要素、学校の教育活動全体で行う生徒指導や教育相談等において最も重要な要素である。また回答率においても、実習前に学生の約65%から85%がこの3項目に注目していることは、大変良好な状態で自己を見つめ、実習に臨んでいると推察する。

表1 教育実習前後に強く考えること

項 目	実 習 前			実 習 後		
	出現数(A)	A / B	A/回答者数	出現数(a)	a / b	a/回答者数
①授業づくりの視点や方法	42	16.6%	64.6%	32	38.6%	68.1%
②指導案の作成能力	25	9.9%	38.5%	11	13.3%	23.4%
③生徒への指導、説明などの伝え方	52	20.6%	80.0%	11	13.3%	23.4%
④専門教養や運動のスキル	9	3.6%	13.8%	7	8.4%	14.9%
⑤授業規律やルールのレベル	8	3.2%	12.3%	7	8.4%	14.9%
⑥安全管理	20	7.9%	30.8%	5	6.0%	10.6%
⑦救急対応	5	2.0%	7.7%	4	4.8%	8.5%
⑧生徒とのコミュニケーション、関わり方	56	22.1%	86.2%	3	3.6%	6.4%
⑨教職員との関わり	36	14.2%	55.4%	3	3.6%	6.4%
⑩その他	—	—	—	—	—	—
合 計	253(B)	100.0%		83(b)	100.0%	
一人当たりの平均回答数	3.89			1.77		

☆今年度はコロナの影響により秋期間の教育実習が増加した。実習後調査は11月1日現在のものであり、全てが回収できていない段階での分析となった。

一方、実習後の出現率を確認してみると、実習前に最も高かった「⑧生徒とのコミュニケーション、関わり方」22.1%が3.6%に激減しており、学校生活全般における生徒との関係づくりについては、学生が予想していた状況より良好な関係づくりが構築されたと推察する。

また、実習後の上位3項目では、「①授業づくりの視点や方法」16.6%が36.6%へと大きく高まり、「②指導案の作成能力」は9.9%から13.3%、「③生徒への指示、説明などの伝え方」は20.6%から13.3%へと変化を示した。この3項目は教育実習で最も重要な要素である授業関連項目である。大学における授業計画力、授業実施能力の向上に向けた学びの工夫・充実など、今後のカリキュラムマネジメントの方向を強く示していると筆者は考える。

加えて他の項目を見ると、⑧生徒とのコミュニケーション、関わり方に加え「⑨教職員との

関わり」14.2%から3.6%などの学校生活全般における生徒・教職員との関係づくりに関する2項目及び「⑥安全管理」7.9%が6.0%を除く5項目の割合が全て上昇していることに注目したい。この5項目に関しては、授業計画段階での目標の明確化とその実現に向けた具体的な学習計画、授業実施段階における準備能力や指導能力、師範力、救急対応能力等に関するものである。⑧⑨の生徒や教員との関係づくりは当然重要であるが、実習後の振り返りで、学校教育の中核である授業関連項目のほぼ全ての割合が上昇していることは、教育実習を通じて、各学生が将来教員になるうえでの能力や適性を考え、課題を自覚する良き機会になったと考える。ただ、授業関連項目である⑥安全管理が割合低下したことについては疑問が残るが、続く調査結果からも確認したい。

2. 教育実習前後の優先順位

表2は「1. 教育実習の前後に強く考えること」と同じ調査項目[10項目]を使用し、実習期間中に心掛け取り組もうとしている優先順位について調査したものである。各項目に対する優先順位[1位から9位]の割合(選択数/回答者数)と上位群[1位から3位]、中位群[4位から6位]、下位群[7位から9位]の平均割合(群別割合)で示した。続くグラフ1は、表2の各項目の群別割合をグラフ化したものである。

表2 教育実習を行うにあたっての優先順位(10項目)[並べ替え]

	1位	2位	3位	1位~3位 合計平均※	4位	5位	6位	4位~6位 合計平均※	7位	8位	9位	7位~9位 合計平均※
1 授業づくりの視点や方法	20.0	15.4	12.3	15.9	20.0	13.8	9.2	14.4	3.1	6.2	0.0	3.1
2 指導案の作成能力	6.2	6.2	13.8	8.7	15.4	15.4	16.9	15.9	9.2	7.7	9.2	8.7
3 生徒への指示、説明などの伝え方	18.5	26.2	24.6	23.1	7.7	13.8	4.6	8.7	1.5	0.0	3.1	1.5
4 専門教養や運動のスキル	1.5	4.6	0.0	2.1	3.1	12.3	10.8	8.7	20.0	18.5	29.2	22.6
5 授業規律やルールのレベル	1.5	3.1	4.6	3.1	4.6	13.8	16.9	11.8	16.9	23.1	15.4	18.5
6 安全管理	16.9	6.2	7.7	10.3	20.0	6.2	15.4	13.8	10.8	10.8	6.2	9.2
7 救急対応	0.0	1.5	1.5	1.0	6.2	9.2	7.7	7.7	23.1	23.1	27.7	24.6
8 生徒とのコミュニケーション、関わり方	32.3	29.2	20.0	27.2	9.2	3.1	3.1	5.1	1.5	1.5	0.0	1.0
9 教職員との関わり	3.1	7.7	15.4	8.7	13.8	12.3	15.4	13.8	13.8	9.2	9.2	10.8
10 その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
				100.0				100.0				100.0

※1位から3位の合計平均割合を上位、4位から6位の合計平均割合を中位、7位から9位の合計平均割合を下位として捉え各項目の割合を算出した。

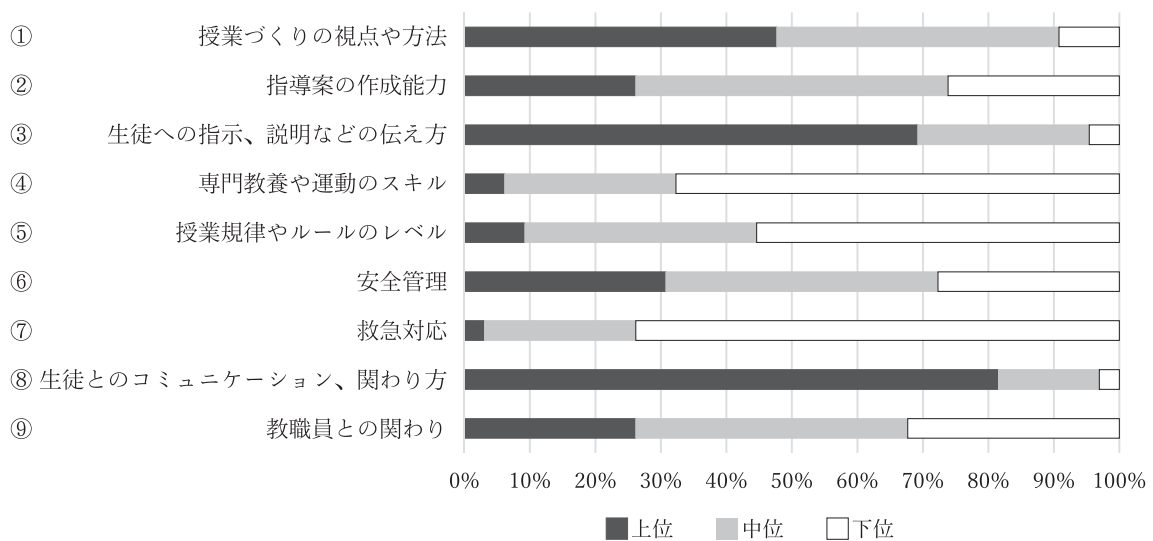
表2では、各項目の上位群と下位群に注目し考察を進めたい(ここでは各群における項目ごとの合計割合で確認する)。前述の「1. 教育実習の前後に強く考えること」で既に確認したが、上位群で「⑧生徒とのコミュニケーション、関わり方」81.6%(1位~3位までの合計割合)「③生徒への指示、説明などの伝え方」69.3%「授業づくりの視点や方法」47.7%と約5割から8割の学生が優先順位1位から3位の範囲で選択している。

一方、下位群を確認すると「⑦救急対応」73.8%(7位~9位までの合計割合)「④専門教

養や運動のスキル」67.8%「⑤授業規律やルールのレベル」55.5%と約5割から7割を超える生徒が優先順位7位から9位の範囲で選択している。実習前と言えども、この下位群に集中している④⑤⑦が授業関連項目と考えると、優れた授業の在り方や教育実習の意義・目的、取り組む優先順位等について、本大学における教職関連授業において一層の動機づけや意識づけが必要ではないかと考える。筆者は昨年度の取り組み状況について詳細に理解できていないが、コロナ禍により通常授業が困難となり、模擬授業も十分できなかったことは大きな要因であったと推察できる。

次にグラフ1から、各項目の上位群、中位群、下位群の占める割合について確認したい。

グラフ1 教育実習を行なうにあたっての優先順位



③生徒への指示、説明などの伝え方⑧生徒とのコミュニケーション、関わり方に関しては、学生の約70%が優先順位上位群に回答しており、下位群では5%未満となっている。①授業づくりの視点や方法は、上位群、中位群ではほぼ45%の回答であり、下位群は約10%となっている。②指導案の作成能力⑥安全管理⑨教職員との関わりの3項目に関しては、3群がほぼ均等の約30%となっている。残りの④専門教養や運動のスキル⑤授業規律やルールのレベル⑦救急対応の3項目については下位群の割合が約55%から70%と非常に高い結果となった。

各学生の能力や目的により優先順に差が出るのは当然であろうが、本調査の結果から、本校学生の教育実習に対するより詳細な思いが読み取れるのではないだろうか。前述で既に確認したが、実習後の結果では、計画、実践等の授業関連項目の意識は上昇した。実習前の調査ではあるが、授業関連項目④⑤⑦の意識が低い結果は、授業を行う上での重要資質として捉えられていないか、すでに十分な力を有しているかの何れかである。しかし後者は考え難く、実習後の同様調査等で確認し授業改善の参考としたい。

表3は表2と同様の項目を使用し、「教育実習を終えての優先順位」とし、実習期間中に心掛け取り組んだ項目の優先順位について調査した結果である。また表4は実習前後の優先順位である表2、3の群別割合をまとめ示したものである。ここでは表4を中心に各項目の変化を確認したい。

表3 教育実習を終えての優先順位（10項目）[並べ替え]

	1位	2位	3位	1位～3位 合計平均※	4位	5位	6位	4位～6位 合計平均※	7位	8位	9位	7位～9位 合計平均※
1 授業づくりの視点や方法	17.4	15.2	15.2	15.9	15.2	17.4	4.3	12.3	10.9	2.2	2.2	5.1
2 指導案の作成能力	2.2	6.5	2.2	3.6	8.7	2.2	13.0	8.0	15.2	23.9	26.1	21.7
3 生徒への指示、説明などの伝え方	23.9	26.1	21.7	23.9	19.6	4.3	2.2	8.7	0.0	0.0	2.2	0.7
4 専門教養や運動のスキル	2.2	10.9	19.6	10.9	6.5	8.7	8.7	8.0	13.0	17.4	13.0	14.5
5 授業規律やルールのレベル	2.2	8.7	0.0	3.6	13.0	21.7	13.0	15.9	19.6	15.2	6.5	13.8
6 安全管理	28.3	10.9	13.0	17.4	4.3	8.7	13.0	8.7	6.5	8.7	6.5	7.2
7 救急対応	0.0	6.5	6.5	4.3	4.3	15.2	13.0	10.9	19.6	10.9	23.9	18.1
8 生徒とのコミュニケーション、関わり方	19.6	15.2	17.4	17.4	19.6	8.7	19.6	15.9	0.0	0.0	0.0	0.0
9 教職員との関わり	4.3	0.0	4.3	2.9	8.7	13.0	13.0	11.6	15.2	21.7	19.6	18.8
10 その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
				100.0				100.0				100.0

※1位から3位の合計平均割合を上位、4位から6位の合計平均割合を中位、7位から9位の合計平均割合を下位として捉え各項目の割合を算出した。

表4 教育実習前後の優先順位比較（上・中・下群別）

	上位		中位		下位	
	前	後	前	後	前	後
1 授業づくりの視点や方法	47.7	47.8	43.1	37.0	9.2	15.2
2 指導案の作成能力	26.2	10.9	47.7	23.9	26.2	65.2
3 生徒への指導、説明などの伝え方	69.2	71.7	26.2	26.1	4.6	2.2
4 専門教養や運動のスキル	6.2	32.6	26.2	23.9	67.7	43.5
5 授業規律やルールのレベル	9.2	10.9	35.4	47.8	55.4	41.3
6 安全管理	30.8	52.2	41.5	26.1	27.7	21.7
7 救急対応	3.1	13.0	23.1	32.6	73.8	54.3
8 生徒とのコミュニケーション、関わり方	81.5	52.2	15.4	47.8	3.1	0.0
9 教職員との関わり	26.2	8.7	41.5	34.8	32.3	56.5

①授業づくりの視点や方法については実習前後で大きな変化は無く、上位群が約50%、中位群が約40%、下位群が10%前後となっている。②指導案の作成能力については前後で大きく変化しており、3群の割合が入れ替わっている。特に実習の下位群において実習前26.2%であったものが65.2%に上昇している。指導案を何枚も作成する中で課題が克服された経緯が窺える。③生徒への指示、説明などの伝え方については①同様大きな変化は無かったが、前後とも学生の約70%が上位群を示しており、教育実習における重要度が再認識できる。④専門教養や運動スキルの項目は実習前後で変化しており、実習後の上位群で6.2%から32.6%と上昇し、下位群では67.7%から43.5%へと減少するなどの特徴が見られた。⑤授業の規律やルールのレベルに関しては、上位群での変化はほぼ無く約10%の低い結果であった。残りの2群では前後の割合の入れ替わりが見られた。⑥安全管理に関しては、「1. 教育実習の前後に強く考えること」において、授業関連7項目の中で唯一実習後の割合が低下した。しかし今回の結果では、実習後の上位群割合は大きく上昇している。実習での授業実践を通して大きく高まったと考える。

⑦救急対応は各群の前後割合に差はあるものの、上位群の割合が最も少なく、続いて中位群、下位群と上昇する。この項目は大変重要なスキルであるが、実習では関連事案を経験しなかったことや、発生した場合も指導教員の適切な対応等があった為と考えられる。⑧生徒とのコミュニケーション、関わり方については、実習後に上位群で約30%の減少、中位群で約30%の上昇が見られた。しかし上位群の占める割合は実習前と同様に高い割合を示していた。最後に⑨教員との関わりであるが、実習後に下位群の割合が60%近くまで上昇し重要度の低下を確認できた。

優先順位の調査では、各項目に対する学生の意識レベルや変化について詳細に確認できた。今後はクロス集計も視野に入れ、授業改善に向けた課題や問題点の研究を深めていきたい。

3. 3年終了までに身に着けるべきこと

ここでは調査項目の整理を行い、前述で使用した調査項目の⑨教員との関りを削除し、新たに『笛の吹き方、号令のかけ方、指導経験（アルバイト、ボランティア等 模擬授業含む）、意欲・関心・態度』を追記した。出現率と回答率で確認を進めたい。表5が項目群である。

表5 3年終了までに身に着けるべきこと（12項目）[複数回答可]

項 目	実 習 前			実 習 後		
	出現数(A)	A / B	A/回答者数	出現数(a)	a / b	a/回答者数
①授業づくりの視点や方法	40	15.2%	61.5%	25	13.0%	54.3%
②指導案の作成能力	48	18.2%	73.8%	25	13.0%	54.3%
③生徒への指導、説明などの伝え方	38	14.4%	58.5%	34	17.7%	73.9%
④笛の吹き方、号令のかけ方	10	3.8%	15.4%	13	6.8%	28.3%
⑤専門教養や運動のスキル	16	6.1%	24.6%	12	6.3%	26.1%
⑥授業規律やルールのレベル	9	3.4%	13.8%	7	3.6%	15.2%
⑦指導経験（アルバイト、ボランティア等 模擬授業含む）	31	11.7%	47.7%	26	13.5%	56.5%
⑧安全管理	15	5.7%	23.1%	12	6.3%	26.1%
⑨救急対応	8	3.0%	12.3%	8	4.2%	17.4%
⑩生徒とのコミュニケーション、関わり方	26	9.8%	40.0%	20	10.4%	43.5%
⑪意欲・関心・態度	22	8.3%	33.8%	10	5.2%	21.7%
⑫その他	1	0.4%	1.5%	—	—	—
合 計	264(B)	100.0%		192(b)	100.0%	

実習前後いずれも回答率約50%以上の学生が「3年終了までに身に着けるべきこと」として選んだ項目は、①授業づくりの視点や方法②指導案の作成能力③生徒への指示、説明⑦指導経験（アルバイト、ボランティア等 模擬授業含む）の4項目であった。また、実習後に上昇した項目は、「③生徒への指示、説明」58.5%から73.9%「④笛の吹き方」15.4%から28.3%「⑦指導経験」47.7%から56.5%「⑧安全管理」23.1%から26.1%「⑩生徒とのコミュニケーション、関わり方」40.0%から43.5%の5項目であった。実習後に学生の73.9%が選んだ③生徒への指示、説明について、実習後2番目に高い割合を示した（実習前4番目）⑦指導経験などは大学での学びではならず、教育実習に頼らざるを得ない現状がある。一方、教員採用試験においては、

一次試験での一般教養や教職教養等に集団討議や個人面接が加わり、二次試験等においても面接や模擬授業等の指導実践力が問われる現状となっている。この状況からも、実際の指導場を想定した大学での学びを充実できるよう改善が必要であろう。この2年間は感染症対応として人との関わりが制限された。この制限から得られた知見もさらに発展させつつ授業実践に関する科目の更なる工夫・改善に取り組まねがならないと考える。

4. 保健体育科教員になるために求められる資質

表6で最も高い出現率は、「①生徒理解力」の16.3%であり、回答率では学生の約9割が選んでいる。続いて出現率の高い順では、「⑥コミュニケーション能力」15.0%「④教科指導力」13.4%「③安全管理能力」11.4%と続いている。教育現場である学校での実習を通して、学生自身が授業や部活動、ホームルームなどの教育活動において生徒や教職員と関りながら感じ取った結果である。専門教育の指導力、授業実施上の安全管理能力の高さが求められる保健体育科教員である前に、一人の教育者として必要な資質が生徒理解であり、生徒理解のためにはコミュニケーション能力が重要と感じているものとする。

表6 保健体育科教員になるために求められる資質

項目	出現数(A)	A / B	H25調査※	A/ 回答者数
① 生徒理解力	40	16.3%	12.2%	87.0%
② 生徒への愛情	21	8.5%	8.6%	45.7%
③ 安全管理能力	28	11.4%	8.9%	60.9%
④ 教科指導力	33	13.4%		71.7%
⑤ 授業づくりの視点	25	10.2%		54.3%
⑥ コミュニケーション能力	37	15.0%	9.9%	80.4%
⑦ 専門知識	26	10.6%		56.5%
⑧ 体力と技術	13	5.3%	4.6%	28.3%
⑨ 教育に対する情熱	23	9.3%		50.0%
⑩ その他	—	—		—
合計	246(B)	100.0%	100.0%	
一人当たりの平均回答数		5.35	6.46	

一方、本大学の先行研究において、一人当たりの回答平均数が比較的類似（H25:6.64, R3:5.35）していた平成25年調査との比較（5項目）では、①生徒理解力③安全管理能力⑥コミュニケーション能力が今年度特に高い出現割合を示している。先行研究との対比では、調査項目数や項目の表現、回答者数、回答時期等により結果はおのずと変化すると考えるが、ここでは出現率で比較し、回答率を参考値とした。

この調査においても、コロナ禍における制約された学校生活や諸活動の影響が出ていると推察する。特に「①生徒理解」や「⑥コミュニケーション能力」の教育のベースとなる人間関係づくり項目や、「③安全管理能力」の傷害、感染症などの対応踏まえた安全な教育環境の項目が高い割合を示したことは、その重要性を学生が強く感じ取ったのではないかと考える。

なお、表6※のH25先行研究における項目は、○教師力○生徒理解力○生徒への愛情○指導力○授業の考え方○コミュニケーション能力○体力と技能○知識○授業力○意欲○安全管理能力○情熱○授業を楽しむ能力○指導案の書き方○その他の15項目であった。今回の調査と同様の質問項目①②③⑥⑧の5項目を比較のため記載した。

6. 指導教員からの指摘や賞賛

表7、8については、授業に関して指導教員から指摘されたことと褒められたことに関する回答内容である。表8の調査項目は平成25年先行研究とほぼ同様とした。対比割合は出現率を活用した。先ず表7の指導教官から指摘されたことから確認したい。

表7 授業に関して、指導教員から指摘された印象に残っていること

項 目	出現数(A)	A / B	H25調査※	A/ 回答者数
① 授業を計画するうえで注意すること	20	10.5%		43.5%
② 説明・指示の出し方	30	15.8%	12.2%	65.2%
③ 次の展開に進む際の繋がり	20	10.5%		43.5%
④ 立ち位置	15	7.9%	8.9%	32.6%
⑤ 安全管理	15	7.9%	5.2%	32.6%
⑥ 発声	9	4.7%	6.3%	19.6%
⑦ 笛の使い方	9	4.7%	8.9%	19.6%
⑧ 指導案の作成方法	10	5.3%	4.4%	21.7%
⑨ 言葉遣い	10	5.3%	4.4%	21.7%
⑩ 規律の確保	4	2.1%		8.7%
⑪ コミュニケーションの取り方	9	4.7%	1.8%	19.6%
⑫ 知識・教養	11	5.8%	3.7%	23.9%
⑬ 黒板、ICTの活用方法	9	4.7%		19.6%
⑭ 準備の重要性	19	10.0%	6.6%	41.3%
⑮ その他	—	—		—
合 計	190(B)	100.0%		
一人当たりの平均回答数		4.13	4.44	

最も高い出現率を示した項目は「②説明・指示の出し方」15.8%であり、学生の65.2%が指導教員から指摘された。H25年調査においても同様に最も高い出現率であったが、出現率では3.6%の差が確認できた。次に出現率の高かった項目は「①授業を計画するうえで注意すること」「③次に展開に進む際の繋がり」の2項目であり、いずれも10.5%の出現率を示し、43.5%の学生が指摘されたことになる。上記3項目に続く出現率10.0%以上であった項目は「⑭準備の重要性」である。H25年調査が6.6%であったことを考えると、本年は場の設定や教材づくりなど授業開始前の取り組みに課題があったと推察する。実に全実習者の41.3%が指摘されたことになる。

本年、H25年とも、各項目の出現傾向は類似していると考えるが、本年は「⑦笛の吹き方」が4.3%低く、「⑪コミュニケーションの取り方」は3.9%高い結果となった。⑦はH25年に8.9%

の出現率となっており、本年の教育実習事前指導において笛の吹き方を学んだ結果が良い形で出ていると推察する。一見些細な事柄との捉え方もあるが、学びの結果が素直に出ているのではないだろうか。また、⑩コミュニケーションの取り方に関してはH25年に1.8%の出現率となっていた。本年が4.7%となっていることは注目すべき値と考える。教科教育法や事前指導の在り方については常に見直すことは当然である。先行研究時に低かった出現率が高くなっていることは、コロナ禍における様々な制約の中で、学生自身が授業や部活動などの学園生活、その他の生活空間において、関わり、触れ合い、刺激し合いながら育まれるコミュニケーション能力の育成に課題があったのではないだろうか。今後⑩コミュニケーションの取り方については、支援する側がしっかりと意識し、その育成の手立てや学習方法を検討し、大学における工夫された授業実践が必要ではないだろうか。

最後に「⑩規律の確保」2.1%である。「規律」と表現すると堅苦しさや集団行動の厳しさなどスポーツの魅力に反する表現のように解釈されがちである。しかし、規律ある授業ではスムーズな技術習得や適切な運動量確保、良好な人間関係の構築などに関して、安全にしかもスピード感を持った授業展開が可能である。この出現率が僅か2.1%であることは、学生の集団把握力や教師としての基本姿勢に一定の評価があったと解釈できるのではないだろうか。ただ8.7%の学生が指摘されたことは支援側の課題でもある。

表8 授業について指導員から褒められたこと [複数回答可]

項 目	出現数(A)	A / B	H25調査※	A/ 回答者数
① 学校生活	8	4.1%	4.5%	17.4%
② 実習への取り組み	24	12.4%	14.4%	52.2%
③ 授業の工夫	23	11.9%	8.9%	50.0%
④ 発声	26	13.4%	14.4%	56.5%
⑤ 授業者としての姿勢	13	6.7%	5.0%	28.3%
⑥ 進歩している	25	12.9%	9.4%	54.3%
⑦ 板書がきれい	16	8.2%	5.4%	34.8%
⑧ 説明の仕方がうまい	2	1.0%	1.5%	4.3%
⑨ 経験を踏まえた指導	7	3.6%	6.4%	15.2%
⑩ 指示	10	5.2%	5.4%	21.7%
⑪ 生徒との関わり	29	14.9%	14.9%	63.0%
⑫ 生徒との距離規律の大切さ	11	5.7%		23.9%
⑬ その他	—	—		—
合 計	194(B)	100.0%		
一人当たりの平均回答数		4.21	3.31	

次に指導教員から褒められたことに移りたい。この調査項目は13項目中12項目を先行研究と同じ項目とした。一人当たりの平均回答数は本年が4.21となりH25先行研究は3.31であった。結果は表8のとおりである。

最も高い出現率を示した項目は、「⑪生徒との関わり」14.9%となっており、先行研究においても同じ出現率であり最も高い評価を得ている。表1から表3でも窺えるが、実習に対する

学生の最優先項目でもあった。回答率でみると、実習前に学生の86.2%が強く意識し、63.0%の学生が指導教官より評価されたことになる。続いて「④発声」56.5%「⑥進歩している」54.3%「②実習への取り組み」52.2%「③授業の工夫」50.0%となっており、上記5項目に渡り学生の約50%以上が高い評価を得たことになる。

最も低い値を示した項目は、先に述べた表1から表5からも推測できるが、「⑧説明の仕方がうまい」4.3%である。H25先行研究においても同項目は最も低い評価の出現率1.5%であり、同項目の出現率1.0%と類似している。教育実践経験がほぼ無い学生段階では当然の結果である。「うまい」とまで行かなくとも、②③⑥で高い評価があることは大変喜ばしい事であり、実践経験を積めば自ずと力がつく可能性を秘めていると考える。この他、「⑨経験を踏まえた指導」15.2%「①学校生活」17.4%「⑩指示」21.7%「⑫生徒との距離規律の大切さ」23.9%となった。

また、H25先行研究との出現率比較において±2%以上の隔たりがある項目で、本年マイナス項目が「②実習への取り組み」-2.0%「⑨経験を踏まえた指導」-3.5%となり、プラス項目では「③授業の取り組み」+3.0%「⑥進歩している」+3.5%「⑦板書がきれい」+2.8%となった。この結果から、指導教員にとっては、教育実習における学生の取り組みは全体的にやや低い状況であったが、授業は意欲的に取り組み成長した。しかし指導経験の少なさを感じた実習であったと考察する。筆者は立証することはできないが、新型コロナウイルス感染症の影響を多分に感じるところである。

IV. まとめ

本研究は、教職に関する科目の充実を図ることを目的として、保健体育科教員にとって必要な資質である知識・技能、意欲や態度、そして授業計画力や実践力に対する学生の意識変化と指導教員による学生評価について調査したものである。

1. 教育実習の前後に強く考えることに関しては、実習前は授業づくりに関する生徒への指示や関わり方に高い出現率を示した。実習後は授業準備、授業実践、専門教養等に関する項目の出現率が高まった。
2. 教育実習前後の優先順位に関しては、各項目に対する意識のばらつきが優先度としてより詳細に見とれた。「1. 教育実習の前後に強く考えること」の裏付け資料ではあるが、単純に優先度が低い高いだけの評価でなく、項目ごとの優先上位、中位、下位の3群比較により、学生の意識変容が確認できた。指導案の作成能力では、実習前後で3群の割合が逆転しており、特に下位群において26.2%であったものが実習後に65.2%に上昇するなど、各学生が授業目的を明確にし、その目的達成に向けた授業内容をしっかりと練り上げまとめ上げた指導案の作成を繰り返す中で、不安が自信へと変化していく心の変容が窺えた。
3. 3年次終了までに身に着けるべきことでは、実習前後いずれも回答率約50%の学生が選んだ項目として、①授業づくりの視点や方法②指導案の作成能力③生徒への指示、説明⑦指導経験（アルバイト、ボランティア等 模擬授業含む）であった。保健体育科教員として必要な資質について、学生自身が教育実習の前後で自己を見つめ直し選んだ項目である。
4. 保健体育科教員になるために求められる資質としては、8割以上の学生が生徒理解力や

コミュニケーション力を選んでいる。教育は生徒理解から始まるとの思いであろう。先行研究との比較（5項目）では、生徒への愛情がほぼ同様の出現率を示したものの、残り4項目全てが高い値を示した。コロナ禍における様々な影響が関連しているものと推察する。

5. 指導教員から指摘されたこととして最も高い回答率を示した項目は「②説明・指示の出し方」であり、学生の65.2%が指導教員から指摘されたことになる。続いて「①授業を計画するうえで注意すること」「③次に展開に進む際の繋がり」の2項目においては、学生の43.5%が指摘される結果となった。本年、H25年とも、各項目の出現傾向は類似しているが、教育実習事前指導において取り組んだ「⑦笛の吹き方」では低い出現率となっており、学びの結果が素直に出たと考える。一方、指導教員から褒められたことでは、「⑩生徒との関わり」「④発声」「②授業の取り組み」「授業の工夫」の4項目が50%以上の回答率を示したが、「⑧説明の仕方が上手い」「⑨経験を踏まえた指導」など授業実践に関わる項目に関しては5%を切る回答率となった。

今回の調査では、生徒や教職員との関係づくりに関する項目と、授業の準備・実施に関する授業関連項目との意識変化に注目した。学生は、教師の資質としてベースになるものは生徒理解と信頼関係であり、その上に授業計画力や授業実施能力を身につけねばならないと感じ取っている。

この思いをもとに、大学における教職に関する科目の工夫・充実を図らねばならない。授業づくりの視点や方法の習得、指導場面での指示や支援、安全対策の実際など、指導経験を積み上げるためのシラバスづくりや新たな科目設定、授業展開の工夫などが必要であろう。

参考文献

- 1) 齋藤正俊 (2015) 「実習時における学生の意識と指導教員の意識について」
- 2) 齋藤正俊 (2016) 「KS女子大学の『教員の資質能力』についての意識調査」
- 3) 文部科学省総合教育政策局教育人材政策課教員免許企画室長 平野博紀 (2021) 「教育実習の意義や実施状況について」
- 4) 西岡加名恵・石井英真・川地亜弥子・川原琢也 (2013) 「教職実践演習ワークブック」ミネルヴァ書房